

ゲーテにおける一つの明るさ

水 谷 洋

一八二三年九月二六日、ゲーテが翰長フォン、ミュラーに朗読した次の詩は面白い。西東詩篇の「天国の巻」の中に今は収められている。翰長フォン、ミュラーの手記によればこうある。「一人の天女(Herrin)が天国の門の傍で守衛に立っている。そして詩人(ゲーテ)を内に入れようとしない。というのは彼女は詩人を資格不十分なものと考へ、彼の信仰の為の戦いに対する証明を要求する。そこで詩人は彼女に次の様に答える」とあつてその詩が引用されている。

兎角のためらひをやめたまひて

吾を門内に入れよかし

そは吾現世に在りては人間たりしが

そは戦ふ者たるを意味すればなり

無論これはその詩の一節であるが、この一節は非常に面白い。どう面白いかと言うと、ゲーテの人間というものに対するふてぶてしい自信がそのまま言葉になつて出て来ているからだ。しかも非常に明るいふてぶてしさである。俺は人間だから、つべこべ言わずに天国へ入れて呉れ、人間という奴は、そりゃ見た眼にくだらぬ苦勞をやっているかも知れんが、やっぱりなんとか頑張つて生きてるんだ、それが人間なんだ、みんな涙流して強く頑張っている、けなげな奴なんだ、人間はみんなそうなんだから、だから人間というだけで入れてくれたっていいだろう、というのである。なぜ彼が、こんなに強く人間に対する自信を持つつか、一応疑われても仕方のないところだが、しかしあまり疑い過ぎてはならない。私達お互いが持つ、あのやり切れぬ自己の存在の根底は、白々しい疑いの眼の前には必らず閉ざ

されるものだからだ。しかもゲーテはいつも潜水夫の様に、生命の、少くともいくらか普通よりは深いところからもぐり出て来て口を開く。人間に対する彼の自信はとにかく決して浅くない所で為されているのだ。ファウストのただ粗筋だけの意味でも握みたいと思う時、この深いところでなされている人生肯定の自信が大きな緯をなしていることを知らねばなるまいと思われる。それは古代の様に深い神との默契という形で、彼の生涯を貫いている様に見えるのだ。ファウストの救済ということも、勿論そのこととつながっているわけだが、そういう面を今、悪魔的な彼の相貌と組合せながら簡単に見て行こうと思う。

詩と真実第一章の末尾にあたる挿話をこゝで思い出してみよう。史記の孔子略伝の中に「兎たりし時、嬉戯するに俎豆を陳ね、礼容を設く」という有名な話がある。あれをすぐに私達には連想させる個所で、少年ゲーテが旧約風の神への祈りをやる話である。「神へ近づく道は甚だ異様なものであった」と前置きして彼はその話を書いている。神の作品である、あらゆる天然物を代表させるものとして、家にあり合せの鉱物標本を持ち出して来て、それを神と見立て、赤いラック塗りの金の花模様をついた父親の楽譜台にピラミッド型に鉱石の類を並べあげたのである。そしてそれに、芳香を放って幽かに燃えて燻ぶる薫香燭を供え、小さな司祭は最初の礼拝を行う。目で見、耳で聞き、実際にかがねば、神であろうと何であろうと認めようとしなかったということは、単に少年時代一般の心理の業とのみ解したくない。たとえそう解したとしても、この少年時代の、手で触れて物を納得するという直接性は、その強さを殆んど失うことなく後年まで持ち続けられたことを注意する必要があるだろう。考える程この事は容易なことでもなく、苦惱をも、愛情をも、彼はじかに彼の手でわしずかみにするのである。悪魔も又頭からふって湧かなければならなかった。暗い影は文字通り暗くて暗くてしょうのないものであったに違いない。想念のいたずらなどと仮りにも決めつけられぬものだったろう。悪魔が現れないから俺は今ファウストの続きを書くわけにはゆかぬ、とイタリーから歎きの声をもらしていたのを思い出してもいゝかも知れぬ。ところで或る朝、少年ゲーテは点火鏡で祭壇の薫香燭に火をともしして敬虔な祈りを捧げる。だがそれを繰り返すうちに、燭台用の陶器の皿がなかったので、じかに楽譜台に薫香燭をとりつけた。この気安さの天罰は大きかった。夢中で祈っている間に、いつの間にか蠟燭は燃え尽きてしまつて、火が祭壇に燃えうつっていた。後に真黒い跡が出来たが、赤の地に黒々とするされたその焼け跡は、少年ゲーテを恐る

しい連想に追い込んだ。まるで「悪魔が逃げ失せた時の足跡の様」だと思わせた。祈りに貫ぬかれた彼の心がそんな連想を呼んだのか、それにしても子供の無邪気な連想とは思えぬ匂いがある。古代人のアニミズム的な心理をこゝにかぎつけてもさして不自然には思えないだろう。一番大きな鉱石でその跡を隠そうとしたが無駄だ。一度信じたものがおそらく彼を引きずり込むのだろう。彼にはもう祈れない。悪魔しか居なかったのではないかと思われるばかりである。天罰にくらわされた如く茫然自失する。無意識によって導かれた最も素朴なこの祭壇は、突然の意識によって、不吉な将来を予言する様にこの時崩れ去る。爾来彼は何事にかけても最早祭壇をつくりあげることを殆んど拒んだ様に見える。彼の心は、神を見ることを自分に許さない。知ることも、あるいは祈ることさえも自から拒む。そして、彼の心から出た神への烈しい憧憬を再び彼の心の沈黙の中へ沈めてしまったのではあるまいか。秘密はもう一度秘密の中へ返る。時ならぬざわめきが不可視の世界からはるばるやって来て、一時さわがせ、心に静かな波紋をなげかけて、帰りぎわにさつと悪魔の刻印を押しつけて逃げるとでもいった具合のものだった様だ。ともあれ、この旧約風の祈りのことは、幼な心の彼がその背後の神のほう大な拡がりを、ほう大なまゝの拡がりて深く感じた証拠の様に思われる。そして「神はただ予感され得るに過ぎない」ハリーマーとの対話、という後年の彼の確信の中にまで明らかにこの影は尾を引いている。

だがこういう彼の先天的なあて、不可知、不可見なものに對する身をくつろいでのあて、というものは、更に彼の生涯に於て遡ろうと思えば遡れるものだ。これも又有名なリスボンの地震についてのものであるが、詩と真実の中にもそのことについて報じられてはいるが、それとはちがった、ベッティーナ・ブレンタノの書簡が記している話である。リスボンの地震について祖父と一諸に説教を牧師から聞いて帰って来た時の話である。その説教というのは、人間はこの事件がいかに残酷だと泡をくって驚いているが、そして神も仏もないのではないかと面くらっているが、しかし創造者の賢察というものは依然として存在するものだという内容のものだったらしい。祖父に今日の説教はどうだったと聞かれて、その時グーテは「すべては説教師さんが言うよりずっと簡単かも知れない。不滅の魂というのは不運によってなんか害の受けようのないものだ、と神はよく知ってられるのでしょ」と言ったというのである。神の賢察、救済などさえ必要でないこの思い切った自信、これは明らかに彼の後年まで続くわけだが、彼はこれを、実

に美しい「予感」という言葉で真珠の様に押しつゝんでしまう。元来、昔から彼の口は彼の天啓だったかも知れないのだ。心だけが悪魔の様に苦しく、又淋しかったに過ぎぬのではないか。どこか彼の知らぬ頭の一角で、きっと神が声をかけていたに違いない様だ。予感はそのから彼にも知られずこっそり流れていた様だ。そしてこれは彼の奥深い自信の底とは似ても似つかぬ天と地の開きがあった様にも見えるが、「喜びと苦しみとが合わさる」(西東詩篇考察の巻)のあたまらない時の様に、苦しい幸福感のうちにこの二つは融け合って一つのものとなっているらしい。彼はそのふてぶてしい自信を、予感の様な美しいものに仕立て上げてしまっていたのである。そういう人間だったと思う。

詩と真実の中にこれも又面白い一つの挿話がある。劇場でフランス語を学んでいた幼い頃の一椿事の話である。自分と同じくらいの年頃の美しい踊り子を見ていて、その幕間かなにかに、自分の連れに向ってこんなことを言ったというのだ。「あの子も今はあんなにきれいに着飾って立派に見えるけれど、今晚はどんなほろ／＼のジャケツで眠るか知れたもんじゃないね」と。するとそばに踊り子の母親が聞いていて、たちどころにゲーテをどやしつけた。あの子の才能はお前達の考えているのなどは較べ物にもならぬぐらいに大きな幸福を約束するのだと言う。詫びるにも仕様のない程相手を怒らしてしまつて、ちぢみ上がってしまった時、なにくそと思つたのか、突然彼は吐き出す様にこうつぶやいたそうだ。「なぜそうがみ／＼言うんです。今日の紅顔、明日の白骨、(heute rot, morgen tot)」。このことがあつて暫くしてから、もうそんなことのあつたことなども忘れてしまつた頃、その踊り子は病氣になり、次いで重態になつたという話を聞き知つた。死んだかどうかは知らなかつたと彼は言っている。が彼はこれを偶然の一致などという簡単な気持ちでは話したがつていない。そこが面白いのだが、「時宜を得ないのみか、不作法な言葉で」時々語られる彼の予言の一つと見なし、いかにもなつかしげに書いているのだ。(詩と真実第三章)これは彼の予言の一つであるが、予感とてやっぱりこれに類するものであつたと思う。己れの身のどうすることも出来ぬものだったのだ。まして彼の所謂一私見一独断という様なものではなかつたのだ。おそらく、古代の予言者の予言の様に、やはり堅い質のもの、未知のもの、天来のものであつたと思われる。そういう何かとつびもなく古いものを、近代的な自信の様に見せかけて彼はかかえこんでいる。つまり彼の自信という近代的な相貌を、私達は十分に警戒してかからねばならぬ程なのだ。神の現われる時というものは偶然だとゲーテはリーマーに向つて言っている。予感の現われる時とい

うものも、そういう人間に予知出来ぬ偶然に違ひなかつた。だから天上の神が地上の悪魔を救つて行くという全く天来のでしかない時、瞬間、というのもそういう偶然でなければならぬ。又彼がその確かな耳でイデアの音楽を予感のうち
に聞くのもそういう偶然であつた筈なのだ。「神が直接人間の言葉で天上の教えを教えるだろう」△西東詩篇歌人の
卷Ⅴそういう時を信するのである。だからつべこべ頭を悩ます必要もあるまいと言う。ゲートルに神はドイツ語でその
真理を語ってくれる筈なのだ。事は実は簡単なのである。恐ろしく複雑な事実を簡単な原理がささえている様に、ゲ
ートルにおいても自然にそうなっていた様だ。神の現われる時まで、人間は耐えられるだけ苦しみに耐えていれ
ばいいのだ。突然何か本物の音が鳴り出すまで待っていればいいのだ。人間に必要なのは己れの苦惱に耐える忍耐だけであ
る。そういう、言わば一見自力にして、だがあくまで深い他力から発している努力というもの、これが勿論ファウスト
の中にも具現されるわけだが、こういう気分底というもの、これはとにかく非常に古代臭の強いものと言つてもい
ゝもので、かなり非近代的なものではあるまいか。近代的なウインドウに並べられてみたが、まだ潮の香りのきつ
くする貝殻とでも言ったものを、ゲートルの予感味あわしてくる。それだけに、この予感、乃至予言といった形のも
のが少年時代のまだ何でも感じられる心に、極めて大きく、極めて美しく拡がった光景は、ゲートルならずとも私達に
もなつかしく思われるものだ。ゲートルは己れの心の原型を書き留むるとも言った気持ちで書いたりしているが、人
間への最初の懷疑の日覚める頃の、あの酔えるが如き疲労の中に、おそらくは予感だけがまだ蕾の様に打ちひろが
っている茫とした驚異と寂寥の時期、静かに神へのつながりを発見する、いや発見している、ということは、これは実
美しく、やはり人生の事実としてただならぬ物と、私達も大切に思わねばならぬことだろう。この様にして彼は、既
に幼少の頃からもう、神を求めて現実をさぐる様なあさましい認識の奴隷を、頭から見下す地位に立っていた様だ。
「若き日の願ひは年老いて後ゆたかにみたされる」という美しい格言を彼は詩と真実の第二部の冒頭に掲げている
が、この言葉の人生の深さの様に美しいことをゲートル程に美しく感じることが私達に許されていないのではないか。
がさがさと毎日を忘却から忘却へと渡し去って、いとまもなく現実の生活に追いまくられる生涯の中で、若き日、
長い生涯のつづらな種であつた、芽であつたと、過不足なく還元して見得る眼というものは、余程澄んだ眼でなけれ
ばなるまいと思われる。しかし若き日の芽を押しおぼして、それだけで生涯というものを見渡せる眼というものは、

もつと澄んだ眼でなければならぬかも知れない。この甚だ澄明な眼も、人生の処生智的な眼とは、やはり類を異にしている様な眼だ。ゲーテは幼かった頃、自分の誕生星（木星と金星）を眺めて、あるいはその位置を計算板に並べたりしてみても、母に向って「あの星は私を忘れやしないでしょうか、それから、私の生まれた時約束したことをきつと守ってくれるでしょうか、」と聞いたことがあるという話が、やはりベッティナー・プレントナーによって残されている。母はその時、「なぜお前はそんな星の加護を欲しがるのか、他の人達は星なしですまさねばならぬのに。」と言った。するとゲーテは誇らしげにこう言った。「他の人が満足していることで、私はすますわけにはゆかないのです」と。夙に彼は神の飲料、ネクタルによってその身を養われていた恰好だ。人間とは彼にとって一個の仮面に過ぎなかつたのではないかとさえ思いたくなる、不思議な彼の一面である。澄明な彼の眼も、やはり彼のこういうなげないだけに深く心の底におし隠されている、神とのつながりの気持ちというものと、一連のものとして考えなければ理解出来ぬ様に思われる。

無論彼は苦惱の子に変わりはない。けれど、いかに彼が絶望と懷疑の業苦にせめられても、彼はこのほのかな神とのつながりの気持ち、人間としての明るい予感を断じて捨てない。ファウストが、毒杯を口にしながら、教会からの天使の合唱に、ふつと幼時の楽しい思い出を思い出して、毒杯を飲みほすことをひきとめられる場面が、ファウストの中にある。無論彼にあっては、神というものは偶然にしか現われなことを先に述べた。しかも偶然のちよつとした衣裳をつけてしか現われて来ないのである。この場合もファウストは、教会の神をこの時思ひはしなかつたのだ。そうではなくて、遙かな幼時のあの楽しい思い出を思い出したに過ぎないのだ。けれど彼は、遙かな幼少を夢みる目で、おそらくその同じ目で、自己の現在の内部の深さに沈みこめられている、外ならぬ神への道を夢みていたに違いないのだ。俺は伊達に幼少の夢などを持ってたわけじやなかったと、彼は言いたかつたかも知れない。古代人は未来というものを持たず、繰り返えされる過去だけしか持たぬと言われる。過去というそんな淋しい道を通して、その向うを神は人間に覗かせるのかも知れない。だがこれをうっかり口には出さない。悪魔しか居ないこの世ではないか。彼は結局又暗然たる底なしの沼に落ちこんで行くのであるが、しかし、一旦予感のうちにひそかに己れの道を神に通じさせている彼にとって、たとい現実が彼に死を迫るものであろうと、容赦のない人間の業苦を、彼はむしろ喜ば

うとする程である。人間がこの世で、たとい意識の格闘に身をひきさかれる仕末になっていようと、彼はいさゝかも眼を掩おうとしない。ファウストの口から毒杯を飲まずまいとそれをもぎとった、そこはかとなき彼の回想を通しての予感、これは、後程彼の悪魔に対する皮肉な言葉の中に、形のないまでに刻みこまれて隠されてしまったが、これこそ人類という無体に苦しむ姿のまゝ、傲然と悪魔に立ち向う当のものではないかと思う。俺をひきずりこめるなら一つやって貰おう。そういう気持ちなのだと思う。だがファウストは、悪魔の限界など、自分の意識の限界の様なものじやないかと考えるのだ。悪魔のことなんぞこちらの方がよく知っている。ゲーテのこのファウストにとって、恐らく人間の方がどれくらい不可解か知れやしないのである。伝説本に忠実に従ってマローもファウスト劇をなしているが、この情熱の子は、俺だってファウストに負けるものかと言ったあんばいで、やけに悪魔的な情念を傾け尽し、伝説本同様、神との結合によらなければなんとしても安定出来ぬファウストを創り上げている。助けてもらえないファウスト、これがあらゆるファウストの基礎で、これがファウストの本道に違いない。マローはその本道にとつくんだのである。ではゲーテはその本道からそれているのか。ファウストを救うなどは邪道じやないか。確かにそうなのだ。がこの邪道を通してゲーテは、キリスト教的な伝説本の示すミイラのようなファウストを乗り越える。恐ろしく素朴な神の息吹きをもう一度吹きこんでやろうとするのだ。人は知るまい、だがこの助けてもらえぬファウストもやっぱり一人の人間なのだと考える。自分自身の中に神を持ち、自分自身で安定しなければなるまいものなのだ。その為に自分は生きている様なものではないのか。ゲーテは人間を信じ過ぎてその中に神を見ようとするのではない。誰もが忘れ果てて信じようとする人間、神の様にひそかな面をもう一度なんとか思い出したいのだ。

マローのファウストもこれはこれなりに非常にすさまじい。がこれが最後にくつがえる。本当のすさまじさはその時まで待たねばならぬ。が待つというそんな暇が人間にあるだろうか。何物も待てない現在只今のこの悪魔的な現世。誘惑とは単なる人間の欲望に過ぎぬのではない。神を空想としては見られないゲーテに、悪魔もやはり空想上の悪魔ではなかった。生きて、現に動いている悪魔を見ているのである。悪魔は人間の様に生きているのだ。又人間も悪魔の様に生きている。がこゝで又も余計なことを付け加えておくとすれば、ゲーテは御丁寧に、そんな悪魔的な状態の特殊な人間からでも、救済が可能だということを示そうとしたのではないということだ。おそらく彼は、人間を

画く素材として、悪魔的なもの以外殆んどこの世では見つけられなかったのだと思う。ただそれだけの理由で彼のメフィストを導入して来たものと思う。と、そう言ってもそう言い過ぎでないのではないか。悪魔的なものがあまりにもこの世で生き生きしているが故に、悪魔が人間的にも、人間が悪魔的にもなったのだ。悪魔とは、とにかくどうしようもない素材の現実だったに違いない。殊に彼が、ウルファウストを書いた時のように、涙の出る様な己れの淋しさ、苦しさを、孤独という一本の筆で次から次へと書いて行った時、その描き出されて来るものは、救われる契機などの見つけられようのない代物でしかなかったに違いない。ひょっとするとファウストは地獄へ行くのではないか。そう、若いゲーテに思われただろうと思う。ウルファウストの暗さを私達はどうしても否定出来ない。

けれどファウストは人間なのだ。ふてぶてしい人間としての自信を決して失おうとはしていない。人間はきつとどうにかなる。迷えるだけどこまでも迷いこんでも、人間はたとえ神になり得ぬとしても、又悪魔にも結局は墮するものではない。悪魔の様に単純では人間あり得ないのだ。ファウスト劇の中で、メフィストはだん／＼影を細くして行くが、人間の最後のどんづまりまでは、悪魔の息は続かぬらしい。人間は悲劇をその最後まで平然とやり通す。悪魔のまう踏み込めぬ所まで、人間は年老いて尚自分を持ち込むことが出来るのだ。ゲーテの意識はこの時、もう一度彼の生まれ出でて間もない頃の、清らかな、深い淋しさを蔵している、あの幼時の空間を意識するのも知れない。ゲーテは六十二才の或る日こんなことをリーマーに言っている。「昆蟲に見られる種々のシステムについて。一が他を侵蝕し、他に変態してゆく。人間にあってもそうだ。小児時代にはすでに理性が現れる、別様の理性が。ついで思春期に入ると悟性が現れる。ついで名譽欲が、ついで利欲が。最後に再び理性が。ただしこれはすべての人間に於てというわけにはいかない、なぜなら多くの人間は利欲のところで立ちどまったまゝだから」と。こゝで一生の始めと終りにおかれる理性はやはりゲーテの独特の意味をこめて使われているらしいが、それがなにかゆかしい感じを私達に起させる。こういう感じを起させること自体がくせ物なので、こゝの場合、この理性ということも決して安易な意味ではない。キルケゴールに反復という書があり、反復という概念が彼の重要な思想的主題の一つであったが、しかもかなりこの概念は難解な要素をふくんでいるのであるが、その反復という気持ちにも近いものを、ゲーテはこの理性という言葉に持たせてあるのかも知れない。とにかくゲーテは悪魔なんぞに知られてたまるものかという明るい人間的な要素をそ

こゝにひそかに仕込んで置くことは実に手なれたもの様だ。あたかも神がそう仕込んで置くんだと言う様に仕込むのだから驚く。それはとにかくとして或る日又ゲーテは、ファルクに非常に神妙な面持ちでこんなことを言った。その日はヴィーラントのお葬式の日で、「彼において稀にしか見られないような、或る壮嚴な気分」が認められたそうだ。「いつかの対談で私は人間をば、自然と神とが行う最初の対話と呼んだことがありますね」。引用はこれだけで今の場合沢山なのだがもう少し後を引くとすれば、「他の遊星においてこの対話が遙かに高く深く賢明な工合に行われていることもあり得ます。私はそれを少しも疑いません」とある。この日ゲーテがヴィーラントの死に刺戟されて語った話は、何かに憑かれた様に語っていて、日頃のゲーテに似合わず、珍らしく神秘的な事をボンボン投げつける様に語っている。非常に面白い彼の面を私達にうかがわせてくれるのだが、今はそれについては触れないでおこう。ただ人間を神と自然との対話的な存在として見なければならなかった時もあったということを知っておきたいのだ。少くとも悪魔などの知ったものではない存在、これが人間というものだという意識は、彼はかなり奥深くに潜んでいたのだと思う。こういう存在の意識を資本にして、ファウストは悪魔と有名な賭をする。がこんな賭など、ゲーテにとっては最早や人間の悪魔に対する、相手が悪魔だからこそ一つのポーズに過ぎない。見せかけに過ぎない。あるいは自信の皮肉な告白に過ぎない。悪魔的な世界にしかこの現世が見えない、その現実を前にして、彼は満腔の自信をもって悪魔に対し、実は己れの神のみぞ知る永遠に賭けるのだ。少くとも表面的な山師的の面がまえの裏側で、彼はこっそりと彼自身にも気づかせない様に神に祈るのだ。人はそこに現実の誘惑にやぶれて、ありったけの罪悪を背負いこんだ、途方に暮れたファウストを見る。虫けらの様にふみつけたって惜しくないファウストを見る。浅はかな人間、苦惱ということに耐えて行くというだけの人間、ゲーテもしかと、それだけの厚みになった人間をみつめる。祈りはそこから自然と立ち昇って来るのだ。「不滅の魂というものは不運なんかによって害を受けようのないものだ」という理性の声を立ち昇らせる。ささやかな人間の生命であるこういう祈り、神とのかすかなつながり、彼はこれを求めて現実のぶ厚い森にさまよい込んだのだ。自然とそれが白骨の様に見出されるまでかけずり廻ったのだ。私達は祈りということを容易なことの様に考え過ぎていてのではないか。ゲーテはそんなことは言わなかった。始らぬじやないかと怖い顔をする。問題はみんな現実にある。なまのまゝ目の前にあるこの現実にある。悪魔など問題になるもの

か、といった調子の様に思われる。それ程ファウストの中で、空想上の悪魔は手足をしぼられて、かえって人間の姿に近い。とにかく悪魔が問題なのではなく、悪魔的な現実が問題なのである。あるいは彼の最初のファウスト計画として残されているノートの中の言葉を使うならば、無形式 (Formloses) 乃至は内容 (Gehalt) ということである。そこにこそ生きている人間の生活である。迷うしか能のない人間の姿である。それを見て悪魔的の見なければならぬ、それ程やり切れぬ現実である。だがそこにこそ神は居なければならぬと思う。悪魔が人間を引きずりこんで行くという世界、だが人間自身も実は喜んで一度は行って見たいと思う世界であれば、そこにこそ神も居合せねばならぬ。だが見たところどこにも神は居ない様な世界である。彼は悪魔と賭をやって早くけりをつけてみたいのだ。だが現実がこの作品の完成をうんと長びかせた。この間ゲーテはファウストに関する空想の滓を徐々に洗い清めて行ったのではなかるうか。漠然とそんなことを考えさせられる。

ファウストの中の有名な句に「とまれ、瞬間よ、お前はあまりにも美しい」(Verweile doch, du bist so schön) という句があるが、これはマローのファウストの「すこしでも、一瞬でも時間を、生きておりたい」という、死ぬ間ぎわの言葉の逆説的なパロディーである様に思う。悪魔などに期限を切られて殺されなくたって、人間は独りで死ぬことが出来る。だが最初ファウストはこの言葉を、ぬくぬくと温まれる幸福の否定の為に使った。人生とは二ガ虫の様に己れの苦惱をかみしめているのが生きているということだ、だからもし俺がこんな言葉を使ったら、それは悪魔にでもたぶらかされてぬくぬくとした幸福感にあざむかれていと言うものだ。だが俺は人間、絶対にそんな馬鹿なことはあり得ぬ、そう信じてファウストは身のうづく様な苦惱の世界に飛びこむ。悪魔を身のそばに置くことによって、死をぐくと近くまで引っぱりこんだが、同様に苦惱という形の生もぐくと力の限り引っぱりこんだのだ。死は消えた。彼の予測は当たっていたのだ。だがそのうちに年移って、生きてることが死の様に静かな時というものが来た。苦惱はあくまで苦惱ながら、又喜びの味が舌を静かに打つ様になった。悪魔との契約を忘れた。忘れた時、彼は苦惱の底をぬいて、死ぬことがそのまゝ生きることである様な光明を見つめていた。神は迎えに来る筈だった。今までかくれにかくれていたあの明るい予感、神との結びつきが又蘇えって来た。結局ファウストは悪魔との契約を、人間の中に潜む、悪魔なんぞには知られ得ない永遠を賭けてやった結果になってしまふのだ。ゲーテは人間の苦惱をこういう清

い背景の上で魔術の様に錬金してしまふのだ。ファウストの予感に引きずられる様にして、無論神はファウスト劇の最後の場面でその空ろな姿を現わす。ゲーテはエッケルマンに、この結末の神はキリスト教からの借り物ですと、語っている。人を喰った様な笑い顔を充分想像出来る。おそらくファウストはそんな神によって救われる以前に、実際は自分で自分を救っていたのだと言つてもいゝのではないか。彼にとつて救済ということは、生きて迷つて苦んだのと同じ一つの必然だったのではないか、ある時は悪魔の生れ代りかと思われる姿の人間も、人間である限り苦しみ、戦うだろう。その苦しみ戦うかぎり又救われる。いかに人生に對する不満を彼がかこち、人生と共に滅びようとしても、その当の人生そのものが彼を人生から救つて行く。人間とはそうしたものだと思つて彼は考へる様だ。この深い覚悟、深い自信は、かくれてはいたにしても最初から彼のファウストの中にあつたと思われる。幼時のあの明るい天啓の様なのが、ゲーテの、嵐の様に時烈しかつた生涯の底をぬつて、やはり流れて行つた様に、ファウストの中にも最初から、この神との默契は底に流れて居つたのだと思ふ。だからヨブ記という古代の莊重な音が、石の様に堅い信仰を響かすあの音が、サクンターラの前戯の後をうけて、突如としてその「天上の序曲」の中に鳴りこんでいるということ、これはこう考へて来る時、ファウスト全体にとつてやはり意味の大きな、抜きさしならぬことだつた様に思われる。ゲーテは、あるいはヨブ記によつて、己れの救済の明白な形を読みとつていて、そして、そういうゲーテがファウストを完全に救ひ出しているのではなからうか。なんにしても、あの伝統的に滅びなければならぬファウストを救ひ出すということは、いかにゲーテの時代とは言へ、なまやさしいことではなかつた筈で、ゲーテという人間がどこかなみはずれて深い神への信頼というものを持つていたにちがいないと思わせるのだ。そしてゲーテの中を探れば、いくらでもその証明になる様なことは出て来ると思われるが、今は一番眼につき易かつたところを、一、二拾ひあげて、考察を加えたままである。こゝで当然取り上げねばならなかつた彼の詩集「神と世界」、その他のことなども今しばらくおく。